

「富士見の歴史」特別講座 <2014・歴史散歩>

～志木のまちの歴史を訪ねて～

平成26年10月26日(日) 9:30～15:30

ボランティア・ガイド 志木のまち案内人の会

今年も快晴の散歩日和となり、神の御計らいにより、最高の「おもてなし」が出来ました。2名のキャンセルがありましたが、22名の参加者とボランティア・ガイド「志木のまち案内人の会」の8人の計30名の散歩となりました。

案内人の会の方は自主参加ということだそうです。8人も集まって頂き、交代でガイドを丁寧にされ、行列の交通安全ガイドと至れりつくせりでありました。また土日閉館の埋蔵文化財保管センターの展示案内も段取りして頂くという感謝感謝の歴史散歩でした。

9:30 柳瀬川駅東口に全員集合

挨拶に始まり、志木市の概要と散歩行程の説明など

(赤帽子の人が、志木のまち案内人の会の方。若干忘れられた方も・・・)



挨拶後、まず今日の散歩行程の説明（柳瀬川東口）

以下のページからは、

皆様にお配りした「散歩の葉」にスナップ写真をいれたものです。

↓↓

第37期・富士見市民大学「富士見の歴史」特別講座
＜2014・歴史散歩＞
～ 志木のまちの歴史を訪ねて ～

いろいろな観点で、楽しく散歩できるコースです。

＜探訪ガイド＞ 『志木のまち案内人の会』の方によるボランティア・ガイド

↓ 志木市のホーム・ページより

志木市の概要

市制施行	昭和45年10月26日
位置(市役所)	東経139度35分 北緯35度50分
面積	9.06平方キロメートル
広ぼう	東西 4.73キロメートル 南北 4.71キロメートル
国勢調査人口	69,611人 • (男) 男34,877人 • (女) 女34,734人 • 総世帯数 28,433世帯 • 人口密度 7,683.3 (1平方キロメートル当たり) 平成22年国勢調査

昭和40年頃から首都近郊25キロメートル圏内で、都心まで20分という好条件から、人口も急増し、住宅都市としても発展してきましたが、自然や田園風景も残されており、市の基本構想に定めている「みんなで創る、みんなのふるさと、輝く志木市」の実現を目指し、市民一人ひとりが住んでよかったと思えるようなまちづくりを推進しています。

志木市の名前の由来

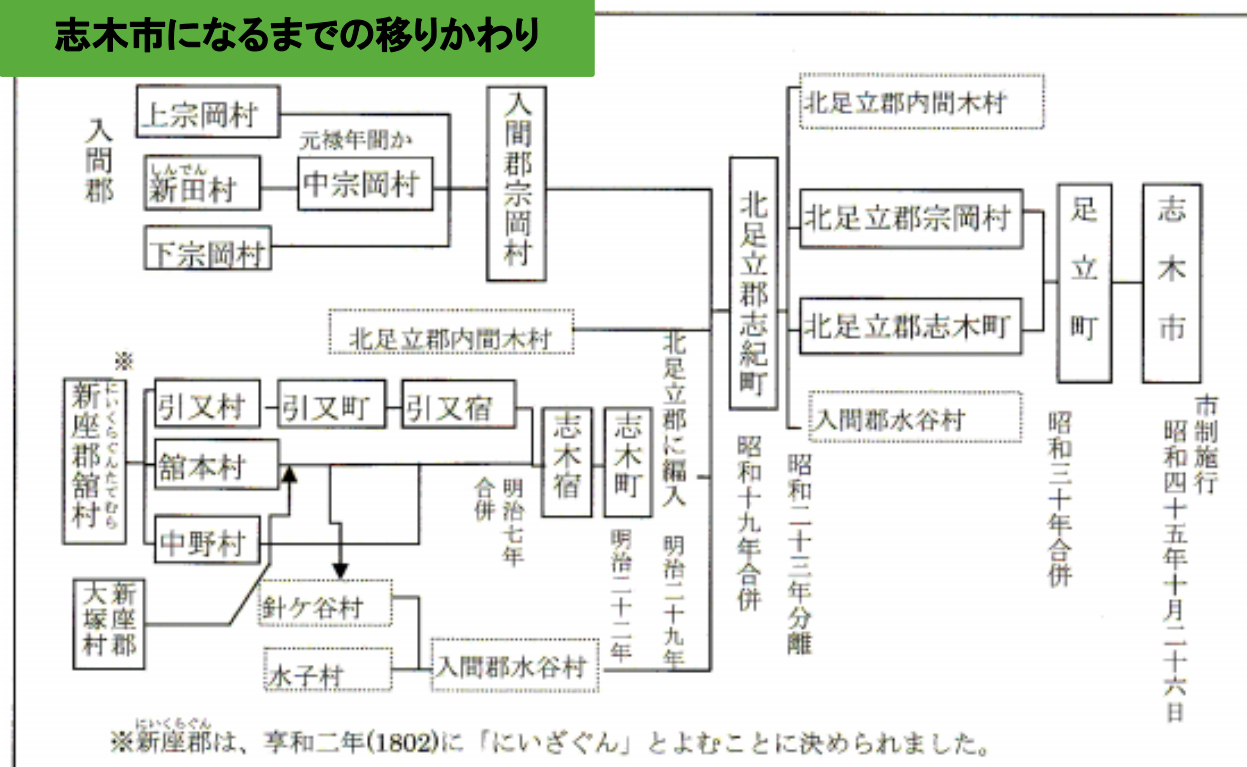
私たちのまちの名、志木市と言うのは、昭和 45 年 10 月 26 日、市制施行に際して定められたものであり、この土地が志木と名のるまでには幾多の紆余曲折ありました。

旧志木町は明治 22 年、町村制施行に当たって、これまで志木宿と称していたのを町に改めたものです。その志木宿の誕生はずいぶん難しいものでした。志木の前身の引又は、館村から分かれた村で、新河岸川舟運の発達と、引又市の繁盛とによって発展して町を称するまでの村でした。

明治 7 年の合併の際に、自分の方が本村であると誇りがあることから村名をあてることを主張した館村と、館村をしのぐ勢いになった引又宿も互いに譲らなかったため、やむをえず双方は命名を県（当時は熊谷県）にゆだねました。県ではいろいろ考えた結果、『新編武蔵風土記稿』などに「志木郷」というのがあり、その名をとって志木宿と名付けたという由来があります。

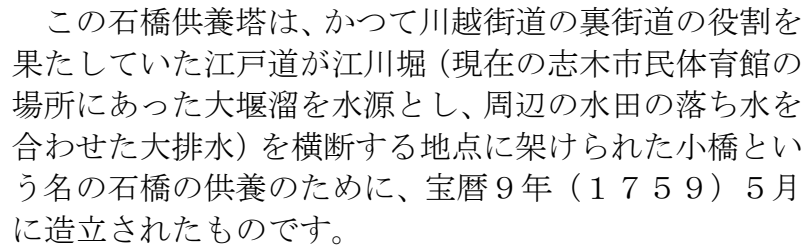
↓しきし歴史まっぷより

志木市になるまでの移りかわり



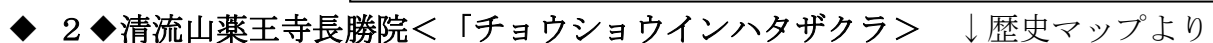


↓案内板より

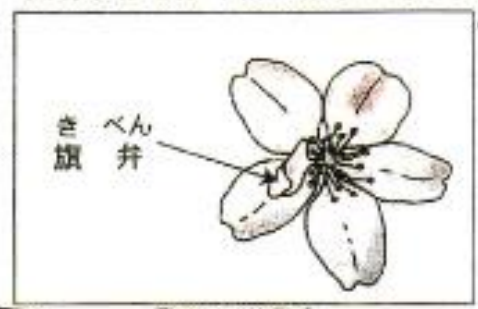


造立にあたっては館村^{たてむら}・宮原弥吉・中野村^{なかのむら}・三枝定八・引又宿^{ひきまたじゅく}・三上幸助他三十人が願主となり、館村・中野村・引又宿・宗岡三組（以上志木市）を始め、現在の富士見・ふじみ野・三芳・川越・新座・朝霞の各市町域にあたる四十四か村からの助成を得ていることが碑文からわかります。

なお、昔は橋には霊魂が宿ると信じられており、新設や修復に際しその橋が長く破損や危険から免れるように供養塔を造立する風習がありました。



チヨウシヨウインハタザクラの花



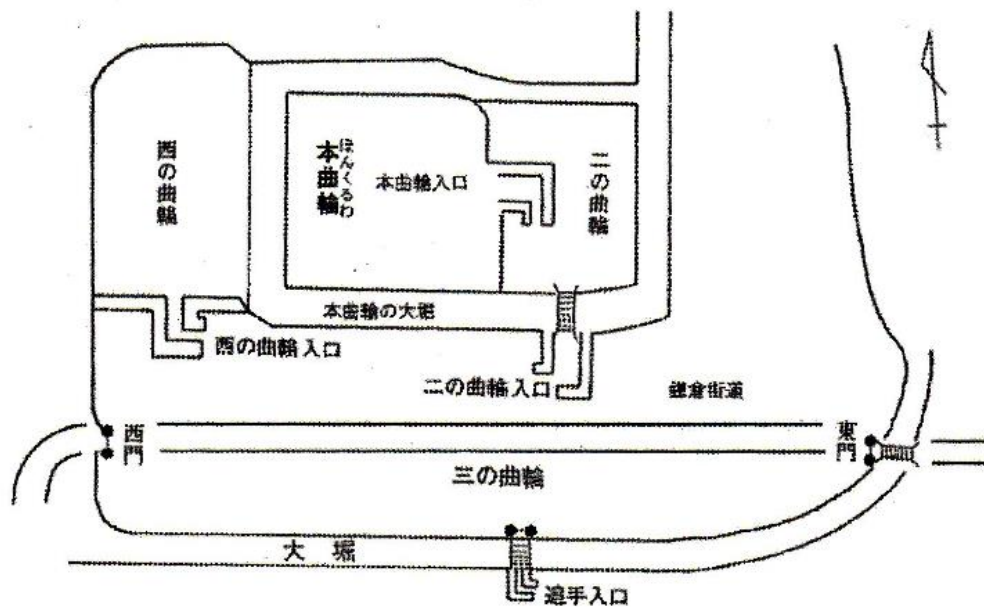
推定樹齡400年以上。おしべの一部が花弁をつけるヤマザクラの一種で、新種として確認された栽培品種

※この地には
「在原業平と皐月の
前」の伝説あり。
(伝説①)



◆ 3 ◆ 柏の城跡

↓歴史マップより
志木第三小学校のあたりに、約500年くらい前に「柏の城」があったということが、江戸時代の『館村旧記』などの書物に書かれています。発掘調査によって、深さが4.7メートルもある大堀の跡が見つかりましたが、城主の名前などくわしいことは、はっきりとはわかっていません。



柏の城城郭想定図（江戸時代の記録などから）



◆ 4 ◆ 館ノ氷川神社

↓ 歴史マップより



延暦年間（782～806）に坂上田村麻呂によって勧請されたと伝わる。

苦戦していた坂上田村麻呂の軍勢が、武蔵国一宮氷川神社（現さいたま市）に祈願したところ、この地で棕（むく）の実がたくさんなっているのを見つけ、食べて元気を取り戻し、戦いに勝つことができたことから、氷川神社をまつたという伝説があります。（**伝説②**）

修復記念碑（市指定文化財）には、村の人々の氏名が刻まれ、江戸時代の人たちが名字を持っていたことが分かります。



◆ 5 ◆ 行屋稻荷

↓ 歴史マップより



正保5年（1648）造立。石幢の六面に六地藏を配した歴史的価値が高いもの。

市内でもっとも古い石仏です。



◆ 6 ◆埋蔵文化財保管センター

↓ 志木市のホーム・ページより

埋蔵文化財保管センター

志木市には、約3万年前から今日に至るまでの歴史が、遺跡として地中に残っています。これらは、埋蔵文化財と呼びます。この埋蔵文化財の収蔵と、発掘調査の拠点施設として、平成22年にオープンしました。また、収蔵展示室を設け、志木市の歴史を実感できるような施設となっています。

場所

志木市柏町1-20-19（第二福祉センター向かい）



◆ 7 ◆地王山地蔵院宝幢寺

↓ 歴史マップより



宝幢寺前の馬頭観音文字塔

市内で一番大きな馬頭観音。高さが2.04mあります。



新義真言宗智山派。創建は、建武元年（1334）ともいわれるが、定説はない。また、「お地蔵さんとカップパ」「ほっぺたの黒いお地蔵さん」の伝説が伝わっている。（伝説③、伝説④）

御鷹場とは、江戸時代、将軍家などが、鷹を使って狩りをするために定めたところで、志木周辺は尾張徳川家の御鷹場でした。御鷹場となった地域では、鷹狩りのための仕事を命じられたり、大きな音を出してはいけないなどの決まりがありました。宝幢寺は、鷹狩りに訪れた三代将軍徳川家光が休息に立ち寄ったことから、御朱印地を賜ったと伝えられています。





- ◆ 8 ◆旧村山快哉堂
- ◆ 9 ◆新河岸川舟運と引又河岸

↓歴史マップより



江戸時代のはじめ（1640年頃）から新河岸川を利用した舟運がはじまり、川越と江戸を結んで、船で荷物が運ばれました。引又河岸ができ、市場も開かれ、宿場町でもあり、奥州街道（脇往還・・・バイパスのようなもの）などの道がとおる便利な場所だった引又宿は、大変にぎわうようになりました。

引又河岸は、明治7年（1874）から志木河岸とよばれ、重要な役割を果たしました。また、宗岡側には、宗岡河岸がありました。いずれも、新河岸川の改修と鉄道の発達によって舟運が衰退する昭和の初めには、その役割を終えました。

明治10年（1877）に本町どおりに建てられた村山快哉堂は、家伝薬を売る薬屋でした。平成13年に、旧村山快哉堂（市指定文化財）として現在の場所に移築復元されました。

いろは橋から、江戸、昭和、平成の三代の堤防を見る事が出来ます



<旧村山快哉堂の説明のあと、昼食>



記念撮影



<午後、散歩コースの説明>



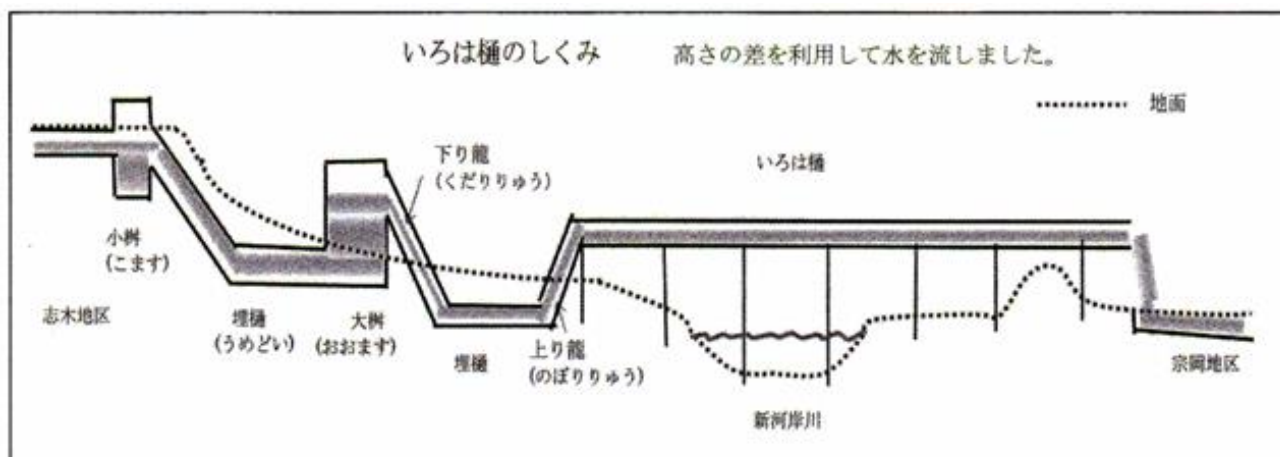
<いろは橋にて、三代の堤防の説明>



◆ 1 1 ◆いろは樋

↓歴史マップより

寛文2年(1662)、宗岡をおさめていた岡部氏が家臣の白井武左衛門に命じて、新河岸川に流れ落ちていた野火止用水を、宗岡でも利用できるようにするために、川の上をわたす大きな樋をつくらせました。樋は、船が通行できるように、水面から約4.5mも高いところに架けられました。板を48枚つなげていたので、いろは四十八文字にちなんで、「いろは樋」と呼ばれ、長さは約260mもありました。(小枘からの樋も含めると358mありました)



いろは樋によって、宗岡へ引かれた野火止用水は、現在のいろは橋交番のあたりから現在の県道を宗岡小学校のほうへ流れ、そこから、宗岡の各地域に分水され、ゆたかなみのりをもたらしました。

その後、いろは樋は、明治31年(1898)～36年(1903)の工事により、新河岸川の下を通す鉄管になりました。現在残っている「いろは樋の大柁(市指定文化財)」は、このときにレンガでつくられたものです。さらに、河川改修が行われたときに一部コンクリート管もつないで改修されました。



◆ 1 2 ◆ 野火止用水

↓ 歴史マップより



野火止用水(昭和28年)

川越城主の松平伊豆守信綱は、領地内の新田(畑)開発を図るため、家臣の安松金右衛門に命じて、承応4年(1655)に多摩郡小川村(現在の東京都小平市)から玉川上水を分水して野火止用水をつくらせました。

野火止用水は、現在の新座市、志木市本町・柏町・幸町・館へ引かれ、たくさんの水路に分水され、広い地域をうるおしました。飲み水や農業用水に困らなくなり、信綱に感謝した人々は、この用水を「伊豆殿ぼり」とよぶようになりました。

現在の本町通り(昔は市場通り)には、昭和40年(1965)に暗渠(水路を地下に埋めたもの)となるまで、野火止用水が流れ、その横に市がたちました。用水の水の力で水車をまわして、精米・粉ひきなどを行っていました。

◆ 1 3 ◆ 朝日屋原薬局(非公開)(国登録有形文化財)

↓ 歴史マップより

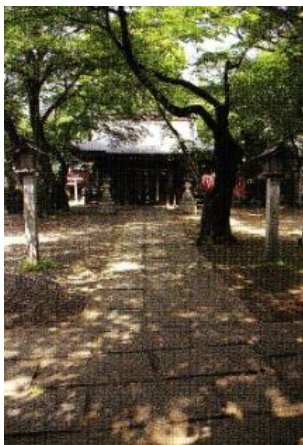


主屋を含む全7棟が国登録有形文化財。明治20年代に創業された薬局。明治45年建築の店舗兼住宅の主屋をはじめ明治から昭和初期の建物構成がよく残されている。

◆ 1 4 ◆ 市場・宿場・河岸場の繁栄の影

◆ 1 5 ◆ 敷島神社

↓ 歴史マップより



引又地区の住民が地区の鎮守として信仰していた村山稲荷の他、星野稲荷、水神社を浅間社に合祀し、明治41年に浅間社境内に創建された。

◆ 1 6 ◆ 田子山富士 (県指定文化財)

↓ 歴史マップより



明治5年6月築造。高さ8.5m、円周125.3m、斜度39度。石造遺物の数・種類・細工などが大変優れており、当時の引又河岸や富士信仰を知るうえで貴重な文化財である。

江戸時代の終わりに明治時代にかけて、富士山信仰がさかんになり、明治5年(1872)には、志木や周辺の人ばかりでなく、江戸の歌舞伎役者などからも寄付が寄せられ、田子山富士塚がつくられました。たいへん大きく、たくさんの石碑のある立派な富士塚です。



田子山富士の説明



立善講寺の説明

◆ 17 ◆立善講寺（りゅうぜんこうじ）

↓案内板より



前身は本門寺（大田区池上）の寺域に日鏡上人が日朗上人を開祖として創建した照栄院で、その約三百年後の元禄2年（1689）本山第二十二世日玄上人の時、鎌倉比企谷宝篋堂談林をこの地へ移し南谷談林と呼び、日玄上人を開祖として朗慶山立善講寺と号しました。

この様に照栄院と立善講寺は本来一体でしたが、時代が下がるに従って分離した様で、明治時代には別個の寺として存在していました。

明治初年、町内の日蓮宗信者による講（一心講）が組織され、本門寺に日蓮宗寺院の誘致を

願い出、明治21年11月に立善講寺が当地へ移転してきました。

◆ 18 ◆江戸道

◆ 19 ◆西川地蔵

↓案内板より

正徳5年（1715）3月に西川四郎左衛門により造立されたこの地蔵尊は、通称西川地蔵 または引又地蔵などと呼ばれています。この地蔵尊は、延命地蔵尊で、家



内安全、無病息災、安産守護、延命長寿などの諸願に靈驗あらたかといわれ古くから多くの信仰を集めていましたが、中でも特に皮膚にできるイボを取り除くのに大変効能があるとして、「イボ取り地蔵」とも呼ばれてきました。

◆ 20 ◆上の水車

江戸時代、野火止用水の流末に位置する引又宿には、上の水車、中の水車、河岸の水車（下の水車）と呼ばれる3台の水車があった。

◆ 21 ◆志木街道

◆ 22 ◆志木駅



以上、散歩の栞とスナップ写真でした。

お昼ご飯を食べながら考えたのですが、「志木のまち案内人の会」の懇切丁寧な説明と8人の方に交代で説明して下さったことが嬉しくて、親睦会をやりましょうと相談をしました。割り勘ではありませんでしたが、受講生6名＋ボランティア5名の楽しい親睦会となりました。

当歴史講座では、昨年は「武州世直し一揆と富士見市域」というテーマで神山様に講義をして頂いており、今年はこの歴史散歩でお世話になり、また、来年の講座は構想中ではありますが、お願いしたいテーマもあり、志木市の方とは、今後共、よろしくお付き合い願いたいと思っています。

散歩道中で、ボランティア・ガイドの皆様が「志木の歴史」に熱心に取り組んでおられる姿を垣間見ることができ、刺激を受けることが出来ました。一ノ倉様、ガイドの皆様、誠にありがとうございました。